

## シンポジウム

### 趣旨説明

佐々木重洋（文化人類学）

人間は古今東西を問わず、機械仕掛けの人形、人形劇、動くキリスト像、仏像など、「人間の姿をした創作物（人形、ヒトガタ、人像）」をつくり、動かそうとしてきた。近年では自分の姿形をほぼ忠実に再現したアンドロイド・ロボットが登場する一方、各種のヒューマノイドの開発や実用化の試みも盛んであるが、これらもこうした流れの延長線上に位置づけられるのだろうか。

そもそも人間は人形をつくり、動かすことになぜ興味を持つのか。民族芸術研究、あるいはアートと人類学研究は、この営為をどのように解釈し得るだろうか。本シンポジウムでは、日本や西欧の人形劇、能楽（文楽）や民俗芸能など、「広義の人形（ヒトガタ）を動かす実践」に関する事例研究を出発点とし、近年のアンドロイドやヒューマノイドをめぐる動向についても時に議論の補助線として意識しながら、研究者と実践者による学際的な議論をつうじてこの問題に迫りたい。

### 「ヒトとモノのあい—等身大人形劇の実践から」

山中海瑠（文化人類学・人形劇）

本発表では、「等身大胴串人形劇」を事例に、人形遣いが「人間（ヒト）」と「人形（モノ）」の主体性および生命をいかに経験し、認識するのか検討する。特に、この形式のパフォーマンスによって海外で高い評価を獲得し、日本の現代人形劇界を牽引した人形遣い・岡本芳一と遣い手・黒谷都に焦点を当てる。二者の人形劇論と作品を比較することで、ヒト／モノの主体性に関する見解の相違と、それに伴う生命観の差異を明らかにする。

本発表では、人間主体の脱中心化と非宗教的な生命性（liveliness）の実現という相互に連関する二つのプロセスに着目することで、行為遂行性（agency）の分散と準アニミズム的な汎生命論を措定する昨今の理論的／批評的分析とはあえて「別の（alter）」視点をとる。そうすることで、人形劇がいかなる哀悼可能性（grievability）を喚起し得るのかを明らかにし、その実践的な意義と可能性を示したい。

## 「アニメーションからバイタリティーへ——現代人形劇における物の命の変容」

山口遥子（人形劇史・芸術哲学）

人形劇と呼ばれる営みは、欧州では19世紀末より民俗芸能から舞台芸術へと再定義され、現在に至るまで発展を続けている。従来人形劇の規範は、人形が人間の動きを模倣し、自律的に動いているように見えることであったが、1950年代に日本の文楽の技法「出遣い」が広く取り入れられたこと、さらに1980年代に欧州各地でオブジェクトシアターと呼ばれる一連の試みが現れたことを劃期として、そうした規範を超え出でる新たな表現の地平が拓かれた。

ここで人形の生命のあり方は、人間が人形に命を吹き込む（animation）という観念や、物に宿る魂という発想ではなく、舞台上における人間との相互作用を通じて発揮される、その物固有の生動性（vitality）として捉えられる。本発表では、こうした歴史的な経緯を踏まえつつ、現代人形劇における具体的な作例を取り上げ、人形や物の生命の捉え方がどのように変化してきたのかを明らかにする。

## 「日本の人形・形代・操りの思想」

中尾薫（演劇学・芸能史）

日本では古来より、人形（ヒトガタ）を作る営みがあった。それらは、人形が、人間の代わりに、悪霊や災厄不浄を引き受ける形代かたしろ、すなわち身代わりとしての役割があると考えられることが多い。いっぽうで、そうした人形に対する古来からの思想と、人形を動かすという行為の間には、どのような関係が見出さされるのであろうか。人形を操り動かすことを見せる芸能としては、大陸渡来の傀儡師、箱廻し、人形浄瑠璃など、遊芸、寺社の儀礼芸能を問わず、多くの事例が挙げられる。

本発表では、芸能史研究において言及されてきた形代としての人形の事例をいくつか紹介し、日本における人形に対する認識について改めて整理する。そのうえで、人形を動かす営みを担う、傀儡や操りに対する言説が、どのような考えとして展開されてきたのかを考察し、形代としての人形という考え方との思想的な接続を試みる。たとえば、人形浄瑠璃の出遣いなど世界的にも特徴的な動かし方が受け入れられてきた背景を探ることにもつながると考えられる。

「ドイツ語圏モダニズムにおける「動く人形（ひとがた）」―舞踊と人形劇を中心に」

山口庸子（ドイツ文学・舞踊史・身体文化）

本発表で「動く人形（ひとがた）」と呼ぶのは、人形、仮面、着ぐるみなどのモノとそれを扱う人間によって構成されるハイブリッドな劇人形的身体のことである。このような「動く人形」は、造形芸術、演劇、ダンス、映画、人形劇など、モダニズム芸術において広範に認められるが、従来ほとんど包括的な研究の対象とされてこなかった。「動く人形」のパフォーマンスの魅力は人間とモノとの交渉にあるが、人間の受動性やモノのエージェンシーを感受する感性は、近代的な学問の言説において周縁化されてきたと考えられるのである。仮面舞踊と芸術人形劇が注目され始めたのも、21世紀に入ってからのことであり、その背景には人間と他の人間やモノとの関係が再び問い直されていることがあげられよう。

本発表では、ドイツ語圏モダニズムの仮面舞踊と芸術人形劇において、「動く人形」が、どのようなものとして実践され、言説化、表象化されていたのかを探ってみたい。

## 一般発表

「ディスフラスとサラマコ：メセレイエスのカーニバルにおける仮面と権力の象徴性」

吉村宥希（文化人類学）

スペインのカスティーリャ・イ・レオン州メセレイエスの村では、伝統的なカーニバルが行われているとされる。このカーニバルは3つの行事から成り、それぞれに仮面衣装「ディスフラス」、顔を黒く塗った「サラマコ」、「王」や「執行人」と呼ばれるキャラクターが登場する。先行研究では、仮面は特に力と関連付けられ、社会調節機能を有するものとされてきた。しかしメセレイエスの事例では、仮面を着用するディスフラスが民衆の娯楽的性格を強く持つ一方で、サラマコやそれが登場する行事には、権力を象徴する行動や構造が明確に見られるという特徴がある。

本発表では、ディスフラスとサラマコが登場する各行事を比較し、その所作や登場人物の名称の象徴性に着目することで、カーニバルが表す権力構造を分析する。また、メセレイエスにおける仮面の文化的意味について検討を行う。

「中央アジア・ウズベキスタンの平織り技法——スルハンダリヤ州ボイスン郡のウズベク牧畜民の生活から——」

志田夏美（民族学）

本発表では、中央アジア・ウズベキスタンに暮らすウズベク牧畜民の生活技術として、平織り絨毯の技法を明らかにしたい。遊牧民の絨毯製品は実にユニークに彩られている。そのような商品を扱う店先で、「この文様は部族的トーマムだ」とか、「邪視除けの文様は家族の安全を願って織り込まれたものだ」とか、様々な語りを聞く。とはいうものの、実際のところはどのようなのだろう。作り手は、絨毯のデザインを一体どのように思い描くのか。

報告者は、ウズベキスタンの遊牧的伝統の解明をめざして、2023～24年に南部地域スルハンダリヤ州ボイスン郡にて半遊牧的な生活文化を保持する山地民のもとで文化人類学的調査をおこなった。そこで絨毯作りに関する技術を通年的に学び、複数ある平織りの技法を地元住民に教わりながら体得した。こうした現代のウズベク牧畜民のもとの参与観察を事例に、絨毯を織るという生活の一場面から人々の選り好みの諸相を描きだしたい。

## 「中国貴州省東南部におけるミャオ族の染色工程と社会的位置づけ」

佐藤若菜（服装）・山田華緒李（染織）

本発表の目的は、中国貴州省東南部におけるミャオ族の染色工程とその社会的 位置づけを、当該地域での調査経験をもとに明らかにすることである。ミャオ族の調査・研究を行っている佐藤と、調査をもとにミャオ族の染色技法を日本で再現する活動を行っている山田との共同で発表を行う。ミャオ族社会において染色布は民族衣装だけでなく、婚礼における祝儀としても用いられている。ミャオ族の染色に関する先行研究においては、染色工程の解明〔鳥丸 2004〕、図案の分類〔馬 1981〕、及び親族 関係に着目した染色工程と染色布の社会的 位置づけの分析〔方（編） 2006, Ho 2011〕が行われてきた。

本発表では、複数の染料の使用とブロンズ現象に着目しながらミャオ族の染色工程を再考する。また、中国では黒色と記されてきた染色布が、ミャオ族においては赤色や紫色として表現されており、この点が染色工程を評価する要となっていることを指摘する。

## 「人と風土が織りなす絹文化―「秩父太織」の軌跡に着目して」

小澤茉莉（絹文化）

今日従事者の高齢化や後継者不足などによって日本国内の絹文化が衰退の一途にある。他方、これまで地域の風土の中で展開されてきた絹文化を次世代に継承しようとする動きも見られる。具体的に、古来養蚕や絹織物の産地として栄えてきた埼玉県秩父地域では、養蚕農家が自らの着物を仕立てるために規格外の繭から糸を引き、「秩父太織」と呼ばれる絹織物を生産していた。この織りの技術は、職人の後継者不足などにより一度は途絶えたが、約 60 年前に復元され、現在数名の職人が秩父太織の生産を担っている。秩父地域で生産された繭から糸を引き、自らの手で織るといふ職人による一貫したものづくりは、絹を生み出す蚕の命、そして蚕が育まれてきた秩父の風土と向き合う行為である。

そこで、本発表では秩父太織の歴史および職人の語りを通して、秩父地域の風土と融合しながら継承されてきた絹文化の実態を 明らかにするとともに今後の展望を考察する。

「民俗芸能を伝えるヒト・ワザ・モノ —鬼柳鬼剣舞の事例から—」

山中千紗子（文化人類学）

全国各地には、それぞれの地域において守り伝えられてきた民俗芸能がある。発表者は、2005年から、岩手県北上市鬼柳町に伝わる民俗芸能「鬼柳鬼剣舞」の伝承活動に着目し、特に、世代から世代へと踊り継ぐ踊り手の活動をみてきた。この間、自然災害やコロナ渦といった環境の変化もあって、芸を後世へ伝えることは、踊り手（ヒト）の踊る技術（ワザ）だけでは成立しないことを再認識した。

本発表では、鬼柳鬼剣舞の踊り手の練習方法や現地公開（盆供養や年間公演）の事例を挙げ、いかにしてヒトからヒトへとワザが踊り継がれているかを提示する。また、鬼柳鬼剣舞では、衣裳や面等（モノ）の調達や製作の一部は主に踊り手の指導者が担っており、このことが踊り継ぐ要素の一つであることも検証する。さらにこれらは鬼柳鬼剣舞のみならず、多くの民俗芸能に通ずる事象であることを提唱する。

「都市祭礼における「本義」追求の諸相—「大垣祭の軸行事」におけるユネスコ世界遺産登録と Covid-19 パンデミックとの関連から—

矢田達也（芸能）

岐阜県大垣市で伝承されている「大垣祭の軸行事」は、2016年にユネスコ世界無形文化遺産の「山・鉾・屋台行事」に拡張登録された事例のひとつである。この祭礼は、ユネスコ世界無形文化遺産への拡張登録前後の2000年～2010年代、そして Covid-19 のパンデミックの影響を受けた2020年前後に、それぞれその伝承内容を大きく変化させてきた。これらの間、祭礼の「本義」とは何かという議論の高まりとともに、伝統の再想像・再創造をめぐる活動が活発化した。

本発表では、祭礼の担い手を中心に、様々な立場の主体による「本義」追求の動きを紹介するとともに、とくに歴史上特別な由緒を持つ「三輛軸」の行事と神事の継続をめぐる祭礼当事者の努力と、行政関係者によるその支援の事例をとおして、祭礼の「本義」がどのように解釈され、継承されていくのか、その過程と諸主体間の相互作用の諸相にも注目しつつ検討する。